

王朝和歌のことばと表現 —— 古今集から新古今集へ ——

短期大学部 紙 宏 行

王朝（平安時代）和歌といえば『百人一首』などでおなじみです。その王朝和歌の表現の歴史について述べていきますが、三百年の歴史がありそのすべてを与えられたスペースの中では述べることはできないので、本稿では、王朝和歌最後の『新古今集』（実際は鎌倉時代初期）に焦点をあてていきたいと思います。

まず、例として次の歌を取りあげます。

春の夜の夢の浮橋とだえして峰に別る横雲の空 （『新古今集』春上・三八）

（現代語訳＝春の夜の、浮橋のようにはかない夢がとだえて、ふと見ると夜明けの空に横にたなびく雲が山の峰から離れようとしている。）

鎌倉時代初期、藤原定家の『新古今集』を代表する名歌です。歌題は「春曙」。現代語訳を付けてみましたが、散文的、論理的な理解よりも、けだるいような春の夜明けの朝焼けに染まる空の、幻想的な風景が思い浮かぶはずです。理屈やメッセージの伝達ではなく、視覚的なイメージの世界の構成をねらった歌のつくりになっています。このような歌の詠みかたは、平安時代の和歌の歴史をふまえて成り立っているのです。

この定家歌のイメージ構成の方法を述べる前に、平安時代の和歌のありようを簡単にふりかえっておきたいと思います。

和歌は、神代の昔から詠みつがれてきた、わが国固有の文芸です（と平安歌人は考えていました）。和歌はこの国を文化的に支え、和歌が盛んであることはわが国が栄えている証しです。和歌は伝統的であることに意味があり、それゆえに、伝統的なことば・表現の枠組みの中で詠まなければなりません。新しいことば、独創的な表現を追求しないわけでは決してありませんが、大きく伝統的な表現の枠の中での個性であり、独創なのです。

このような和歌（文芸）に対する考え方は、個人の抒情、創作主体の個性的、独

創的表現を第一義とする、現代の文芸観とは大きく異なっています。文芸的表現は本質的には普遍性を持ちますが、それに向かう動機や社会的な位置付けは時代精神によってさまざまであることには注意が必要ですし、その文芸観をふまえないければ、正しい理解が得られないのです（何を正しいとするかは問題ですが）。

平安時代の和歌史は、九〇五年の『古今和歌集』の成立で実質的に始まり、一二〇五年成立の『新古今集』に至るまで、三百年の歴史があります。その間、多くの歌が詠まれ、歌のことば・表現が蓄積され、それぞれの歴史を持つようになりました。

平安時代の和歌のありようと歴史をふまえ、再びはじめにあげた定家の歌を読んでみます。それぞれの歌のことばには、辞書的な意味を超えて、和歌の伝統に基づくさまざまなイメージの広がりがあります。冒頭にあげた定家歌のことばの持つイメージはどうなっているのか、ひとつひとつ確認してみます。いずれも、伝統的な表現をふまえたことばです。

冒頭「春の夜の夢」とは、単にある季節に見る夢ではなく、春の夜は短く夢はすぐに覚める、したがって夢の内容もはかないというイメージです。例として、

春の夜の夢ばかりなる手枕にかひなく立たむ名こそ惜しけれ

（『千載集』雑上・九六四、周防内侍）

という有名な歌があります。定家の「春の夜の夢」は、この歌などの例を意識して初句に置かれています。

「夢の浮橋」。「浮橋」とは、川の水面上に多くの筏や舟を浮かべその上に板を渡した橋で、増水するとすぐに流失し対岸との交通もとだえます。そのように、相互のつながりがすぐにたえてしまうような男女の仲をも象徴しています。文芸の世界では『源氏物語』最終巻名になっており、浮舟と薫のはかない恋を連想させます。

「とだえして」とは、そのとおり夢からの覚醒、恋の断絶を意味します。例として、

とだえして人もかよはぬ棚橋は月ばかりこそすみわりけれ

（『金葉集』秋・二〇七、三宮）

などがあります。

「峰に別るる」。この歌句には典拠があります。

風吹けば峰に別るる白雲のたえてつれなき君が心か

（『古今集』恋二・六〇一、壬生忠岑）

この歌の第二句をそのまま引用しています。古い歌の歌句をそのまま取り込むことによって、その歌の全体を想起し、その歌の世界と新しい歌（この場合は定家歌）の世界とが二重写しになって、さらに奥深い歌世界が創造されます（この技法を本歌取りといいます）。この歌では、春の朝焼けの空の風景にやるせない恋の情緒が重なってくるのです。

「横雲の空」とは、横に細くたなびく雲がかかった朝の空ということですが、朝の雲といえば、『文選』「高唐賦」の巫山の神女の面影が浮かんできます。楚の懐王が高唐の地に遊んだとき、昼寝の夢に巫山の神女と契ったが、その神女は別れぎわに「朝には雲となり、夕暮れには雨となってあなたのもとを訪れましょう」と言った、という物語があるのです。現代人には詳しく調べないとわからないことですが、当時の歌人たちにとっては、おそらく簡単な連想だったのでしょう。むしろ、現代人にとっては、『枕草子』一段の「春はあけぼの、やうやう白くなりゆく、山際少し明りて、紫だちたる雲の細くたなびきたる」を思い起こすことのほうが多いと思われれます。王朝的美意識の典型であり、定家の意識にもその美しい風景が浮かんでいたことでしょう。

この定家歌は、それぞれの歌ことばの持つイメージを統合し、十分に生かして詠まれています。題は「春曙」であり、春の朝の空の風景を詠んだ歌ですが、それに加えて、やるせない恋の思いが何となく感じられる歌世界になっています。

このような歌を詠む方法は、どのように自覚されていたのでしょうか。定家の歌論書『近代秀歌』には、次のようにあります。

詞は古きを慕ひ、心は新しきを求め、及ばぬ高き姿をねがひて、寛平以往の歌にならば、自らよろしきこともなか侍らざらむ。古きをこひねがふにとりて、昔の詞を改めずよみすゑたるを、即ち本歌とすと申すなり。

定家は、伝統的なことばを用いながら新しい主題を表現せよ、格調高い歌姿を理想とせよ、と教えています。しかし、古いことばを用いてどのように新しい主題を表現するのか。これは言語表現としては根本的に矛盾しています。その方法については『毎月抄』で教えています。

歌の大事は詞の用捨にて侍るべし。詞につきて強弱大小候べし。それをよくよく見したためて、強き詞をば一向にこれを続け弱き詞をばまた一向にこれをつらね、かくのごとく案じ返し案じ返し、太み細みもなくなびらかに聞きにくからぬやうによみなすが、きはめて重事にて侍るなり。申さば、すべて詞にあし

きもなくよろしきもあるべからず。ただ続けがらにて歌詞の勝劣侍るべし。

ここでは、表現の善し悪しはことばの続けがらによる、と言っています。すなわち、伝統的な歌ことばの持つイメージを生かしながら、それらを効果的に配列し、美的世界を構成する、というのが定家らの詠歌の方法なのです。また、技法のひとつに本歌取がありますが、これは、古歌の一節を引用し、その歌の世界と二重構造の和歌世界を構成するというもの。王朝和歌の伝統をふまえ、歌ことばの特性を捉えた、究極の和歌の創作方法といえます。

新古今の方法には、和歌の歴史をふまえて確立したしっかりした理論があり、その理論に基づいて歌が詠まれています。明確な方法意識を持って作り上げられた和歌であることに特徴があります。そのような明敏な歴史意識の背景には崩れゆく王朝社会への強い危機感があるのです。もちろん、政治史と文芸史を短絡するのには、慎重でなければなりません。

『新古今集』のほかの歌もいくつかあげてみます。イメージの交錯する、幻想的な美の世界を作り上げています。王朝の和歌の歴史におけるひとつの到達点を示しています。歌ことばがそれぞれに持っているイメージを確認しながら、読解、鑑賞してみてください。

昔思ふ草の庵の夜の雨に涙な添へそ山ほととぎす (夏・二〇一、藤原俊成)

(昔を思い返しながら草庵の中にいるが、雨の降る夜に、この上にさらに鳴いて、私に涙の雨まで流させないでくれ、山ほととぎすよ。)

蘭省花時錦帳下 廬山夜雨草庵中 (『和漢朗詠集』山家、白居易)

五月雨にも思ひをればほととぎす夜深く鳴きていづち行くらむ

(『古今集』夏・一五三、紀友則)

きりぎりす鳴くや霜夜のさむしろに衣片敷きひとりかも寝む

(秋下・五一八、藤原良経)

(こおろぎの鳴く霜の降る夜に、寒い夜具の上で、私は衣の片袖を敷いてひとり寝るのだろうか。)

さむしろに衣片敷き今宵もや恋しき人にあはでのみ寝む (『伊勢物語』六十三段)

あしひきの山鳥の尾のしだり尾の長々し夜をひとりかも寝む

(『拾遺集』恋三・七七八、人丸)

白妙の袖の別れに露落ちて身に沁む色の秋風ぞ吹く

(恋五・一三三六、藤原定家)

(まっ白な袖の上に別れの紅涙の露が落ちて、身にしみるように寒い白色の秋風が吹いている。)

白妙の袖の別れは惜しけども思ひ乱れてゆるしつるかも

(『万葉集』 卷十二・三一八二、作者未詳)

吹きくれば身にも沁みける秋風を色なきものと思ひけるかな

(『古今六帖』 一、よみ人しらず)